



伝説の戦場の踊り子
チャン・ネー

作 新田祐介
画 GARSS

sportier

伝説の踊り子、チャン・ネー参上！

ここは、我々が暮らしている地球とは違う星の「ドカ・ノホシ」。

ドカノ・ホシは地球と似ている星であるが、文明は遥かに地球より劣っている。

この世界では人間を種別のひとつとして、その他、豪腕が自慢のドワーフ、尖った耳が素敵なエルフ、巨人という割に2メートル弱くらいの小さな巨人族、平和を望むが大体ツンデレな性格の妖精、弱気なイメージをぶち壊す程強気なホビットという、いわゆる6種類の人種が暮らしていた。

まあなんていうか、いわゆるファンタジーの世界である。

どこかのRPGゲームみたく、魔物と呼ばれるモンスターでも住んでれば良かったのかもしれないが、生憎そのような設定はこの星にはない。

という訳で、この星には「6種類の種別の人材を揃えて、魔王を倒そうぜ！」という設定もないし、「みんなで仲良く鬼ごっこしようぜ！捕まえたよ！ハハ、こーいつう！」というような恋愛要素も備わっていない。

そんな中、今まさに、人間族とホビット族の戦争が始まろうとしていた。

場所はドカノ・ホシの中でも特に広い荒野として知られる、「セキ・ガハーラ荒野。」

人間側の主張は、「最近よお、ホビット族うざくね？うちの縄張りまで入ってきてるしー。ちよっ、これは一回喧嘩売っとくべきっしょ！」という軽い発言。

喧嘩を売られたホビット側の主張。「あんじゃコラア！やるちゅうんかい人間があああ！」「やっちゃんよ？ホビットの実力出しちゃうよ？ちっさいけど、足に毛が生えてるからお前らやっちゃんよ？」

とか言っていました。

ホビットの特徴って、小さくて情けなくて、でもそれなりに勇気があるってところはあるんですが・・・

この世界のホビット、実力なくせに口だけは達者ですから・・・

てなわけで、今、このセキ・ガハーラ荒野で、人口1億8千万人の人間と、人口6千万人のホビット族との戦争が開始されたのです！

お互いに持っている武器は「チャンバラ・ソード」と呼ばれる、ゴムで出来た刀。相手の体のお腹につけられた風船を割られると、その人は戦争に参加できなくなります。こんな恐ろしい戦いが今までにあっただろうか。戦争と呼ばれはいいが、両国とも、誰も命を奪われないのである。

しかし、戦いに参加するものは本気も本気。お互いの戦士共々、国家のためを想って、風船が割れ尽くすまで戦い抜くのです。

その時

ブオオオオー——ッ、ブオオオオー——ッと、開戦のホラ貝の吹く音がする

その音が鳴り終わった瞬間、セキ・ガハーラ荒野の両端に集まっていた人間とホビット族は、一斉に荒野中央へ駆け巡る

風船の命を懸けた戦いが今、始まったのだ

人間「うおおおー——っ！死にさせやああ！ホビット族があああっ！！」

ホビット「じゃかあしゃあこの人間もどきが！わしに勝てる思うとるんかコラアアアアッ！」

荒野の中央で、とにかく風船の割れる音が鳴り響く

「ぐああああー——っ！」「やっ、やーらーれーたー——っ！」

そう声が響くとともに、バタバタと人が倒れる音が鳴り響く

この戦争では決まりごとがあった

自分の風船を割られた瞬間に、自分はその場で死んだフリをしないとイケない

戦争が続く限り、何十時間もその格好をしないとイケないのだ
これほど惨めな仕打ちが、あるだろうか

「子供の遊びか」とツッコミたいあなたの気持ちもよく分かる。

しかし、これが「ドッカ・ノホシ」で決められている戦争の方法なのである。

「うぎゃあああああ——っ！」「ちっ、畜生めがああ————っ！」
そう叫びながら、たくさんの人間とホビット族がその場に倒れていく。

ちなみにこの戦争には、女子供は参加できない。

このような悲しみしか生み出さない戦いには、彼らは参加することさえ許されないのだ。
これが、戦争である。

「がああああ！ミーナ、幸せに・・・！」

「うおおおおっ！俺は、俺は勝ったぞおおおおっ！」パチン

そんな声が響き渡る中

不意に、両国の戦士達に、聞きなれない音楽と声が鳴り響いた

ドンッ、ドンッ、ドンッという音が鳴り、その側で

「NaNaNaNaNaNaN、Na-NaNaNaNaNaN・・・」

と可愛らしい声が聞こえてきた

とにかく、「ナ」と言っているその声は

何故だか戦場のど真ん中で咲き誇る、一輪の花のように穏やかな歌声だったのである

「んっ？」

「なんだ？この不抜けたような声は。」

人間族、ホビット族ともに、その声がする方へ注目した

そこには

「1、2、3、4、5、6、7、8！」

なんと、1から8までの数をちゃんと数えながら、お尻をフリフリしている一人の女性の姿があったのだ。

英語的に言うと、「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ・・・以下省略」である

「……………」

「……………」

互いの戦士達は驚愕した

それはそうだ、こんな残酷な戦場に、一人の可憐な娘が、かわいい声を出してお尻をフリフリさせていたのだから

「NaNaNaNaNaNaNaN、Na-NaNaNaNaNaN……………」

女性は注目を浴びながらも、また更に「ナ」だけの言葉を発する

相変わらず、お尻フリフリである

「おい、なんだあれ。」

「いや、知らねえよ。」

「お前ら人間族の娘じゃねえか、なんだよこれ、どうなってんだよ。」

ホビット族、そして人間族まで戸惑っていた

それはそうだ

踊っていた女性は、見てすぐに分かるように、明らかに人間族の娘だ
年齢は18歳くらい、紫の髪色をした長髪ロングヘアーのその女の子は、人間やホビット族の目を虜にするほどのナイスボディな胸を揺らす

またその妖艶な洋服は、今にも胸やお尻が見えそうなくらい透けっていた

彼女はその場で更にお尻をフリフリしながら、その回りには炎が燃え滾った円盤が3つ飛んでいる

普通人間族なら、こんな特殊な彼女のことは知ってても良いとは思うが

人間族側の頭にも、はてなマークが浮かんでいた

(いや、あんた何してんの・・・) ばりだった。

「NaNaNaNaNaNaN、Na-NaNaNaNaNaN・・・」

彼女はそんな目線も気にすることなく、とにかく踊っていた

もうなんか、すげー踊ってた

「あ、あの一。」

ここで、勇気ある人間族の一番隊隊長であり、それなりにイケメンであるダレヤ・ネンオマエが、彼女に声をかける

「・・・何？」

踊っていた彼女は、不機嫌そうにダレヤを見返す

「い、いや、あなたここで何しているんですか？」

ダレヤは優しく、綺麗な八重歯をアピールしながら、遠慮がちに彼女にそう話しかけた

「本当だぜ。せっかくの戦争雰囲気がいきなり萎えちまったじゃねえか。」

と、ダレヤに続いて話しかけたのは、ホビット族1番隊隊長の、エモン・ドラだった。彼も先程まで、ダレヤとチャンバラ・ソード対決を繰り広げていたのだ

「・・・はあ。」

「何？あんたら私のこと知らないの？」

踊っていた彼女は、ため息をつきながらダレヤとエモンに返事をした。

その瞬間、彼女の回りで回っていた、炎を出している円盤様のものも、火を消してその場に落ちた

「……。」

沈黙。

疑問を疑問で返されたダレヤとエモンは、押し黙るしかなかった。

彼女は怒った顔で、更にダレヤとエモンを見つめる

さすがに兩名も、彼女の苛立った顔が理解でき、二人は顔を見合わせた

「いや、知らないですけど……。」

そう声を発したのは、イケメンダレヤだった

彼は、人間族の中でも特に優秀な人材だ。

若くして人間族の高等大学であるキョウトウ大学を主席で卒業し、エリート街道まっしぐら。戦争が始まってしまい、戦闘要員として徴収されたが、彼の実力はチャンバラ・ソードの開発に注ぐべきだったと、かの有名なエロい、もとい偉い先生も言っていた程だ。

そんな彼の長所は「分からんことはなんでも質問する」こと

この性格が、此の度踊っていた彼女の逆鱗に触れたのかもしれない。

「お前、私を知らんのか？」

踊っていた彼女は、ガンを飛ばしながらダレヤに詰め寄る

「う。ううっ、す、すいません。」

ダレヤもその気迫に圧倒され、後ろに1歩足を踏み出した

「……。」

彼女は少し黙った後

疑問な顔をしていたダリヤとエモンに

自信満々な顔で、こう言った

「……私の名はッ！！」

「チャン・ネー！！」

「言わずとしれた、戦場を駆け巡るッ！！」

「伝説の踊り子よおおお————ッ！！」

バアアア————ンッ

と、何故か効果音が戦場を駆け巡った

更に、彼女はそう言った後、両手を背中後ろに回し、足をくねらせながらポーズを取った。

そのポーズになんの意味があったのかはわからない。

だが、回りの戦争をしている兵士達を黙らせるには、十分な登場シーンだった。

数秒の沈黙が流れた後、ホビット族一番隊隊長のエモンが静かに口を開いた。

「……。」

「いや、誰だよ……。」

彼は哀愁を漂わせながら

静かに、彼女にツッコんだのだった。